

2021 年度 教育・研究年報

目 次

教育・研究年報

【学部】

● 一般教養	1
● 基礎看護学	2
● 成人看護学	4
● 老年看護学	7
● 母性看護学	9
● 小児看護学	11
● 精神看護学	12
● 地域看護学	14
● 在宅看護学	15

【大学院】

● 2021年度大学院科目一覧	17
● 共通科目	18
● 基礎・地域連携看護学	20
● 臨床・応用看護学	21
● 看護管理学	24

個人ごと業績（著書、論文、学会発表、その他）

【学部】

清水 哲郎	27
相澤 出	27
大井 慈郎	28
長谷川 幹子	28
作間 弘美	28
土田 幸子	28
石井 真紀子	29
添田 咲美	29
佐藤 大介	29

勝野	とわ子	30
木内	千晶	30
齋藤	史枝	31
江守	陽子	31
大谷	良子	31
佐藤	恵	32
濱中	喜代	32
下野	純平	32
遠藤	麻子	33
岡田	実	33
長南	幸恵	33
佐藤	つかさ	33
鈴木	るり子	34
石田	知世	34
大沼	由香	34
加藤	美幸	36
工藤	美由紀	36

【大学院】

伊藤	收	37
----	---	----

外部資金獲得状況

●	外部資金獲得状況一覧	39
---	------------	----

2021年度 一般教養領域活動報告

1. 領域構成

清水哲郎（教授）、相澤出（准教授）、大井慈郎（講師）

2. 一般教養領域における教育に関する内容と評価

2021年度は、清水教授は学部では、「探求の基礎」（1年次）、「基礎ゼミナール」（1年次、科目担当者）、「看護倫理」（2年次、濱中、石井と共同）、「人間の生と死」（2年次）、「エンドオブライフケア論」（3年次、濱中、石井と共同）、「臨床倫理」（4年次、濱中と共同）を担当した。前年度末に作成した共通のテキスト試行版を使った授業を実施して教育に役立てつつ、さらに改訂して完成させた。

相澤准教授は1年次開講科目「地域の文化」「人間と文化」「ボランティア論」、2年次開講科目「家族という社会」、「チーム医療論」、3年次開講科目「社会と福祉」を科目責任者として担当した。さらに「保健医療福祉連携論」を分担者として講義担当した。1年次開講の「基礎ゼミナール」については科目責任者として担当し、前期には一斉講義を担当し、後期にはゼミ指導を行った。4年生を対象とした「卒業研究ゼミナール」については、計4名（一般教養領域2名、基礎看護領域2名）の学生の研究指導を行った。

大井講師は「情報処理」（1年次）、「調査と統計」（3年次）、「看護研究方法論」（3年次、勝野と共同）を担当した。「情報処理」は、大学生として必要な情報リテラシーの理解やアカデミックスキルなどを学習するものである。本年度はビデオチャットに関する説明を新たに追加した。「調査と統計」と「看護研究方法論」については、量的研究に関する範囲を同じ教員が担当することにより、2つの授業を関連させながら展開することができた。

3. 一般教養領域における研究に関する内容と評価

2021年度は、清水教授は科学研究費助成事業 基盤研究(A)（課題番号 18H03572）4年目（最終年度）の研究活動を行い、以下のように研究成果をまとめた。1)臨床倫理検討システムおよび意思決定支援の研究開発をまとめ、書籍を刊行した。2)研究成果を本学の最新カリキュラムに活かすべく、倫理関係授業の総合的テキストを、医療・ケア従事者の研鑽にも使える書籍にまとめた。3)研究成果の臨床現場への還元として、医療・看護関係の研修等（オンライン開催）にて講演を行った。

相澤准教授は東北地方における地域包括ケア、在宅医療、介護福祉の研究を継続して進めた。新型コロナウイルスの感染状況も考慮しなければならなかったため、フィールドワークなど調査研究を進めにくい状況であったが、今年度は、宮城県における訪問看護ステーションが核となった地域連携や、在宅療養支援診療所と特別養護老人ホームのチームケアの試みを、社会学的視点から事例検討し、その成果のまとめを行った。

大井講師は大きく、2つの研究を実施した。一つは、科学研究費助成事業若手研究(B)（課題番号 17K13838 代表者：大井慈郎）による、インドネシアジャカルタの都市化研究である。本年はそのデータ分析を実施し、現在成果報告書を執筆している。もう一つは、宮城県富谷市、および岩手県盛岡市緑が丘地区と連携し、新型コロナ感染拡大の影響に関する町内会アンケートを実施した。回収したデータは報告書にまとめ、各町内会に還元した。

2021 年度 基礎看護学領域活動報告

1. 領域構成

長谷川幹子（教授）、作間弘美（講師）、野中みつ子（助教）、武田恵梨子（助手）、千田真太郎（助手 10 月就任）

2. 基礎看護学領域における教育に関する内容と評価

2021 年度は、基礎看護学領域に関わる科目として、1 年次学生対象として「看護学概論」（長谷川）、「看護理論」（長谷川）を担当した。また、長谷川教授を科目責任者として「基礎看護援助論」・「ヘルスアセスメント」・「早期体験実習」・「生活援助実習」、作間講師を科目責任者として「生活援助技術論」が開講され、講義・演習をメンバー全員で展開した。2 年次学生対象としては、長谷川教授・作間講師が科目責任者を担い「療養援助技術論」を領域内教員が分担・共同して講義・演習を担当した。また、「看護過程論」は基礎看護学領域の教員全員が担当した。さらに、「療養援助実習Ⅰ」を作間講師と野中助教、武田助手が担当し、「療養援助実習Ⅱ」では作間講師と武田助手、千田助手が学生指導にあたった。4 年次学生対象としては、「総合実習（学生 12 名）」をメンバー全員で担当し、「卒業研究ゼミナール（学生 9 名）」では、長谷川教授、作間講師、野中助教で分担・共同して指導にあたった。

基礎看護学領域で担当する科目は、看護学の基盤としての役割を担うことから、学生の知識・技術の習得だけではなく、看護師としての態度の育成も目指して各科目の講義・演習内容や方法を十分に検討し開講した。また、学生のレディネスを把握しながら、グループディスカッションやグループワークによる調べ学習、反転授業の方略を用いたアクティブ・ラーニング型授業を多く取り入れた。

このようななか、新型コロナウイルス感染拡大により、講義・演習では感染予防対策を徹底する必要があった。看護技術の自己練習においても密を避けるため、20 名を上限とした予約制とした。しかし、新型コロナウイルスがさらに猛威をふるい、「生活援助実習」は臨地での実習中止が余儀なくされ学内代替実習となった。実習内容は、1 学年の半数を交代で 3 日間ずつ、受け持ち患者実習（事例患者の基本的展開、申し送り・担当看護師との実習計画調整、実施、評価、計画の修正、カンファレンス）と学内代替基礎実習（病床環境の観察、対象者の理解、実習場面の類似体験）で構成し目的に沿って実施した。

基礎看護学領域で担当した各科目の授業評価アンケートでは全体的に評価が高く、「教員の意欲」に関する項目は最高点（4.0）を認める科目もみられた。また、自由記述からは、「看護師になるうえで大事なことが理解できた」、「技術面だけでなく患者と接する際の大切なことなども学べた」、「看護学生として意識が高まった」という記述が散見され、看護技術の知識を学び体験することによる看護学生としての意識の高まりや、看護師としてのあり方について学びが大きかったことがうかがえた。さらに、「今の自分が目指したい看護を改めて考えることができた」、「看護の基本となることがわかった。これからどんな看護師になればよいかの土台を作れた」などの意見があり、看護専門職として実践の基盤となる個々の看護観確立の萌芽がみられた。そして、アクティブ・ラーニング

型授業に関しても「グループ学習を進めることで、自分たちの考えをまとめたり、さらに詳しく考えなければならぬ部分がわかったので良かった」、「自分でただ考えるだけでなく、それを資料として言葉にしたりグループで共有したりして考えを深められたので良かった」など肯定的な意見が多くみられた。また、学内代替実習となった「生活援助実習」においては、学生から非常に高い満足度を得るとともに、今後の新たな演習方略を考える機会となった。

今後も教員自らが自己研鑽に励み、さらに質の高い講義・演習・実習の実現に向けた創意工夫を図っていく必要がある。また、実習に関しては、新型コロナウイルス感染拡大が鎮静化し、臨地での実習が可能となるように期待したい。

3. 基礎看護学領域における研究に関する内容と評価

学内プロジェクト研究に所属している教員（作間講師、武田助手）は共同研究活動を行い、今後、その成果を学会発表および論文として公表する予定である。

また、基礎看護学領域として取り組んでいる学内共同研究：「COVID-19 の影響により臨地実習経験の乏しい新人看護師のリアリティーショックと自己効力感についての実態調査」は、調査に着手したところである。今後、調査結果をまとめて学会や論文にて発表する予定である。

さらに、長谷川教授と作間講師は他大学教員との共同研究で取り組んだ研究について看護系学会学術集会で発表した。これについても、論文として報告する予定である。

基礎看護学領域は他領域に比較して、開学時から授業や実習に関わる比率が高く、教育に時間を多く要するなかでそれぞれが研究活動を行ってきた。しかし、2021年度は2名の欠員補充がなされず、基礎看護学領域の教員は教育活動や業務に忙殺され、研究活動を十分に行うことができなかった。

次年度は、基礎看護学領域として教育活動や業務への偏重をなるべく避け、研究活動にも力を注ぎたいと考える。

以上

2021 年度 成人看護学領域活動報告

1. 領域構成

土田幸子（教授）、石井真紀子（准教授）、吉岡智大（助教）、添田咲美（助手）、佐藤大介（助手）

2. 成人看護学領域における教育に関する内容と評価

今年度の担当科目は、成人看護学概論、成人看護援助論、生活習慣看護論、慢性期看護技術論、急性期看護技術論、がん看護論、成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ、看護管理論、看護教育論、卒業研究ゼミナール、総合実習、早期体験実習、生活援助実習、療養援助実習Ⅰ・Ⅱ、基礎ゼミナール、看護倫理、人間の生涯発達、エンドオブライフケア論、救急看護論、国際看護論の22科目であった。

1) 専門科目について

(1) 講義・演習について

4年次は領域全員で卒業研究ゼミナール（11名）、総合実習（12名）を担当した。卒業研究ゼミナールでは、終末期看護・手術患者への看護、患者教育等のテーマで研究計画書を作成し発表会を開催し、他領域の教員からのアドバイスを受けた。「総合実習」は各自の目標をもとに終末期看護、慢性期患者の看護、周術期看護に分かれ実施した。特に、今年度は県立中部病院の手術室のご協力により1週間継続して手術室看護を実施できた。学生の準備状況には差があり、実施中も実習に臨む姿勢を高く評価を受けた学生がいた。また、患者との関係が図られず指導を要する学生もいた。さらに、「看護管理論」を土田教授が担当し、看護管理は病棟師長が行うものという認識を払拭することができた。「看護教育論」を土田教授と石井准教授講師がオムニバス形式で担当した。教育とは何か、自分たちが学んでいる看護教育におけるカリキュラム構成の考え方など教授した。選択科目の「救急看護論」「国際看護論」を土田教授がオムニバス形式で担当し、急変時の対応、国際的な視点を持つことの意義と必要性を教授した。

3年次は、前期に「慢性期看護技術論」、「がん看護論」、後期に「急性期看護技術論」を担当し、それぞれの看護の特徴に焦点を当て、成人看護学実習Ⅰ・Ⅱに連動できるよう臨床場面を想定して基本技術の復習と応用を考慮して学内演習を実施した。後期には「エンドオブライフケア論」を石井准教授講師がオムニバス形式で担当し、人間の生を全うするための援助について教授した。

2年次は、前期の「成人看護援助論」では、健康障害を有する対象への援助技術の習得に焦点を当て、成人期に多くみられる疾患の主な検査と治療から看護の基本を教授した。後期の「生活習慣看護論」は、生活習慣と疾病の関連から、成人期における人々の疾病予防と生活習慣の改善の重要性について考えられるよう教授した。さらに、糖尿病で教育入院した紙上事例を用いた看護過程の展開と、演習を実施した。しかし、疾患の理解や看護技術の準備学修にばらつきがあり、今後の授業内容の精練が必要である。

1年次後期には、「成人看護学概論」を土田教授が成人期の特徴、成人看護の意義から、教授した。そして、「看護倫理」と「人間の生涯発達」を石井准教授講師がオムニバス形式で担当し、倫理を学ぶ意義や守秘義務、看護専門職の職業倫理などについて教授した。

(2) 実習科目について

今年度担当したのは、早期体験実習・生活援助実習・療養援助実習Ⅰ・Ⅱ、成人看護学実習Ⅰ・Ⅱであった。1年生の早期体験実習は石井准教授講師・添田助手・佐藤助手、生活援助実習は吉岡助教・佐藤助手が担当した。生活援助実習は代替実習となり、科目責任領域（基礎看護学）から要項が示され、実施した。

2年次の「療養援助実習Ⅰ」は、この実習では、看護過程のプロセスのアセスメントの段階に重点をおいた。COVID-19 感染対策として実習受け入れ中止となった施設があった。この学年は1年次に臨地実習できなかったことから受入れ可能な実習病院に相談し全員が臨地実習できるよう、学内と病院を1週間ずつ実習するグループと2週間病院実習のグループの変則体制で実施した。1週間の学内実習では、各看護過程の段階を個人学習後にグループワークで確認するように展開した。しかし、脳梗塞の理解が浅く、看護過程の各要素の理解不足の学生もおり、個人指導を要した。さらに、学内であったためか緊張感が乏しく、態度の面で指導を要する学生もいた。また、毎日のカンファレンスでは発言が乏しく学びを共有することが難しいグループもあった。

3年次前期「成人看護学実習Ⅰ」、後期「成人看護学実習Ⅱ」を領域内全教員と非常勤実習指導者で担当し、全期間を実習できた。これまでの臨地実習よりも看護度の高い患者を受持ち、看護の基本技術の向上と個別性のある看護の実践に重点をおいた。成人看護学実習Ⅱではコロナ禍であったが、可能な限り周手術期や急性期にある患者を受持ち、病状の変化に対応した看護を展開した。この実習では多くの学生が主体的に行動し、受持ち患者と良好な関係を築き、個別性のある看護を実践できていた。しかし、3クールで体調を崩し1週間欠席した学生が1名、4クールでは実習開始1週間前にアルバイトをした学生がおり実習病院より受入れ中止を言い渡された。この2名については、追実習願と関連書類を提出し、教学委員会から許可を受けて、追実習を実施した。追実習は、学内での代替実習とし、それぞれ個別に課題を提示して実施した。日々の課題をやってこない学生と、課題に積極的に取り組む姿勢がみられた学生に分かれ、前者の学生は自己評価も高かった。

次年度からは、受持ち患者の決定が実習初日の午後になる場合が多く、受持ち患者の病態理解のための時間や図書の確保が困難なことから、実習初日を学内日にし、準備学修の充実を図る。

4年次「総合実習」は12名を担当し、終末期看護・慢性期看護・周術期看護それぞれ各自のテーマに沿って実習病院を決定した。終末期看護では緩和ケア病棟で実施し、病院のスケジュールをもとに各自の週間計画をたて実習に臨んだ。1週目は受持ち患者とじっくり向き合い個別性のある看護を考え、2週目は同室者への看護も考えられるようになっていた。周術期看護では、規模の異なる3病院で実施し、それぞれの病院の役割機能を学ぶこともできた。慢性期看護においては、積極的に基本技術の確実な修得に向けた取り組みをし、病棟スタッフからもとても良い評価を得た学生がいた半面、実習期間中を通して事前学習が不足し主体的な実習姿勢が見られず指導を要した学生もいた。

(3) 基礎科目について

今年度は、「基礎ゼミナール」の前期後半から後期に土田教授がグループを担当し、グループでSDGsに焦点をあて「2030年までのゴールに向けて今、私たちができることは何

か！」をテーマとして取り組み、その成果をポスターで発表した。「人間の生涯発達」を石井准教授講師が担当した。成人期の発達の特徴と関連する理論について概説することで、学生にとって成人看護学概論の学修へと連動できていたと考える。

3. 成人看護学領域における研究に関する内容と評価

今年度は、これまでの学内プロジェクト研究に関する論文作成や学会発表が中心だった。

土田教授は学内プロジェクト研究「タブレット端末を用いた教育方法に関する研究」の共同研究者として研究論文「看護系大学におけるタブレット端末活用に向けた基礎的研究－A 大学学生のタブレット端末活用の実態－」を公表した。石井准教授講師と添田助手は学内プロジェクト研究「ケア・スピリット教育に関する研究」の共同研究者として論文『『ケア・スピリット』に関する看護学生の経年的変化－A 大学看護学生に対する調査から－』を公表し学会で発表した。

個人研究では、土田教授が共同研究者として研究論文「敗血症が疑われる高齢救急患者の予後予測因子についての検討」を公表した。佐藤助手は大学院修士課程の研究テーマの途中成果として、研究論文「手術室器械出し看護師の良い渡し方の分析に関する一考察」を研究会で公表した。添田助手についても大学院修士課程の研究テーマの途中成果として、1 演題「Discontinued consultation in Type2 Diabetes patients in Japan－A literature review」を国際学会で発表した。

今後の課題は、領域としての研究テーマを設定し取り組むことである。

以上

2021年度 老年看護学領域活動報告

1. 領域構成

勝野とわ子（教授）、木内千晶（教授）、齋藤史枝（助教）、赤石美幸（助手）

2. 老年看護学領域における教育に関する内容と評価

1) 老年看護学領域科目

「老年看護学概論」は、1年生の後期に開講した。授業内容の工夫点としては、心理的な介入方法としてのレミニッセンスプロジェクトを課し、高齢者へのインタビューを通し、学生の高齢者と看護に対する興味を育んだ。学生の取り組みの姿勢および達成度は高かった。「老年看護援助論」は、2年前期に開講し、ヘルスプロモーションの活動プランを演習に取り入れる工夫を行い、赤石もこの演習指導に加わった。学生の取り組みの姿勢および達成度も良好であった。「老年看護技術論」は、2年後期に開講し、感染管理を徹底し密を避けながら、技術演習を通して実践に即した方法が修得できるよう物品を整備し授業展開の工夫を行った。4年生9名を対象として「卒業研究ゼミナール」を指導し、文献研究3本、研究計画書6本の卒業研究論文を完成させた。

「老年看護学実習」は3年前期・後期に実施したが、全員が臨地での実習を行うことができた。実習前にヘルスアセスメントや基礎看護技術の復習を行える機会を提供した。また、個々の学生の能力差に配慮し最適な環境下で実習できるように事前に学生面接を行い、実習施設と調整した。学生の実習に対する満足度は高く、実習施設からの評価も高かった。4年生10名に「総合実習」を実施した。学生の満足度、実習目標の達成度および実習施設からの評価も高かった。

2) 看護専門科目、統合科目、その他の臨地実習

1年の「人間の生涯発達」、2年の「看護過程論」、3年の「看護研究方法論」、4年の「救急看護論」の講義、演習を領域教員が担当した。また、実習科目では、1年の「早期体験実習」、「生活援助実習」、2年の「療養援助実習Ⅰ」を領域教員が担当した。2年の「療養援助実習Ⅱ」については、学内および実習施設との調整を行うとともに実習指導の要として機能した。ほとんどの学生の取り組みの姿勢はよく、学生の達成度は高かった。

3. 老年看護学領域における研究に関する内容と評価

本年度は、領域教員が中心となり学内プロジェクト研究の成果を日本看護学教育学会誌に投稿し受理された（筆頭者：齋藤史枝、「看護系大学におけるタブレット端末活用に向けた基礎的研究」）。また、学内共同研究（筆頭者：齋藤史枝）として「介護老人保健施設職員の急変時の感染対策を含めた対応の実態とシミュレーショントレーニングのニーズ」に取り組んでいる。さらに、科学研究費助成事業の外部資金を受け、基盤研究（C）若年認知症家族介護者の経験している「慢性的悲嘆」と健康に関する研究（研究者代表者：勝野とわ子）、基盤研究（C）若年認知症家族介護者の健康問題の「見える化」による支援システムの構築（分担研究者：勝野とわ子）、若手研究高齢者看護に携わる看護補助者のワーク・エンゲイジメント・プロセスモデルの検証（研究者代表者：木内千晶）に

についても取り組んでいる。

以上

2021 年度 母性看護学領域活動報告

1. 領域構成

江守陽子（教授）、大谷良子（准教授）、佐藤恵（助教）

2. 母性看護学領域における教育に関する内容と評価

母性看護学領域が主担当となる科目として、2 年次科目の「母性看護学概論」（江守）、「母性看護援助論」（大谷・佐藤恵）、3 年次科目の「母性看護技術論」（江守・大谷・佐藤恵）、「母性看護学実習」（江守・大谷・佐藤恵）、「セクシャルヘルス・アセスメント（選択科目）」（江守）、4 年次科目の「総合実習（母性看護学領域）」（江守・大谷・佐藤恵）、「卒業研究ゼミナール」（江守・大谷・佐藤恵）を開講した。教育に関する学生からの授業評価は概ね「よくわかった」、「面白い」等々、肯定的・高評価の反面、期末試験の成績を見ると、必ずしも学習成果に結び付いていない可能性があり、今以上に学生が興味を持って自ら学ぶ意欲を高められるような教授法を工夫する必要があるかもしれない。成績の良くなかった学生には試験問題・解答用紙を点検し、学習すべき項目を具体的に提示し、知識・技術の定着を促している。

母性看護学領域の領域別実習、総合実習では、実習施設の確保が難しく、北上市、花巻市、遠野市、一関市にある病院等施設を利用している。総合実習では宿泊が必要なため、学生のみならず教員の負担も大きい。また、今後の実習施設としての確保の点でも不確実性が高く、悩ましい。

大学院では 1 名の修士の学生を迎え、母性看護学領域の大学院研究にも取り組んでいる。

母性看護学領域の教員は 3 名であり、今後とも学部と大学院の教育活動を効率よく展開するよう努めたい。

3. 母性看護学領域における研究に関する内容と評価

大谷准教授は、2019 年度科研費助成事業の若手研究に採択された研究を本年度も継続している。今年度は、COVID-19 の影響によりデータ収集が思うように進まず、遂行計画の変更が必要となった。そのため、1 年の研究期間延長の手続きを取った。大谷准教授、佐藤恵助教、江守教授は、「不妊治療後出産した女性の出産体験」について論文としてまとめた（日本生殖看護学会誌、18（1）、11-19）。ほかに、大谷准教授、江守教授は、学内プロジェクト研究：「看護学生の職業的アイデンティティと地元志向に関する研究」について、今年度も継続して調査データの収集、分析を行っている。

一方、佐藤恵助教は、2019 年度科研費助成事業の若手研究が最終年度を迎え、総括報告書を作成中である。また、学内プロジェクト研究：「ケア・スピリット」に関する質問紙調査の成果を佐藤恵助教が筆頭者となってまとめたものが、岩手看護学会誌に採択された。さらに、佐藤恵助教、大谷准教授、江守教授の 3 名で行っている学内共同研究：「新型コロナウイルス感染症蔓延時の妊産婦ケアの実態」では、妊産婦の側からの聞き取り調査とウェブシステムを利用したアンケート調査を行っている。聞き取り調査は 11 名に達したが、アンケート調査の集まりが未だ十分ではないため続行中である。

次年度以降も母性看護学領域として、研究活動を発展・充実させ、微力ながらも社会に

貢献できるような成果を発出していきたい。

以上

2021 年度 小児看護学領域活動報告

1. 領域構成

濱中喜代（教授）、下野純平（准教授）、秋本和宏（助教）、遠藤麻子（助手）

2. 小児看護学領域における教育に関する内容と評価

2021 年度は「基礎ゼミナール」を下野准教授が GW を担当した。関連科目として「人間の生涯発達」を濱中教授が科目責任者として担当した。例年同様に発達理論、小児の発達段階、各期の特徴について概説した。その学びを踏まえて、2 年の「小児看護学概論」を展開し、小児看護学の在り方について教授した。他に「看護理論」を担当し、下野准教授、秋本助教、遠藤助手は「看護過程論」を担当した。後期の「家族看護論」は濱中教授が科目責任者として家族看護学の基礎について教授した。同じく後期には下野准教授が科目責任者として「小児看護援助論」を担当し、小児の看護援助方法、看護過程について教授した。3 年前期の「小児看護技術論」は実習前に必要な技術について、下野准教授を科目責任者として、演習中心にメンバー全員で展開した。また濱中教授は「エンドオブライフケア論」を担当した。卒研ゼミナールにおいては 6 名の学生を指導し、手ごたえのある結果を得た。「小児看護学実習」は保育園では 2 施設加え 4 施設で、病院では県立病院 2 施設で行った。コロナ禍ではあったが、病院実習は全部、保育園実習は最後の本宮保育園の 2 回の学内代替実習以外は臨地で行い、全員実習目標が達成できた。4 年生の総合実習はクリニックでの実習が学内になり、クリニックの医師に講義を依頼し補填した。まとめでは臨地でできたグループと学びを共有した。濱中教授は清水と「臨床倫理」を担当し、倫理的ジレンマ、ケア・スピリット等について実習体験の振り返りを基に展開し成果を得た。

3. 小児看護学領域における研究に関する内容と評価

濱中教授は本学のプロジェクト研究「看護学生のケア・スピリットの認識に対する研究」（石井真紀子筆頭）の共同研究者として成果を学会発表や学会誌投稿を行った。また清水教授の科研の分担研究者として、継続して本学の倫理教育について検討を重ねた。

下野准教授は科学研究費の助成を受け、「早産児の両親を支援するフォローアップ外来における看護援助開発に向けた基礎的研究（課題番号：21K17389）」（研究代表者）に取り組んでいる。2021 年度は、国内外の文献検討を行い、その結果を基に、2022 年度に予定している質問紙調査の研究計画書を作成、研究倫理審査委員会に審査を申請した。文献検討の結果は、日本小児看護学会第 32 回学術集会での発表を目指し、演題登録した。また、小児看護学領域で取り組んでいる「小児科外来に関する研究」は、前年度取り組んだ文献検討を、濱中教授、遠藤助手とともに日本小児看護学会第 31 回学術集会において示説発表した。2021 年度は、小児科外来に勤務する看護師を対象としたインタビュー調査を計画していたが、新型コロナウイルス感染症の収束が見込めないため、中断している。

以上

2021 年度 精神看護学領域活動報告

1. 領域構成

岡田実（教授）、長南幸恵（准教授）、佐藤つかさ（助手）

2. 精神看護学領域における教育に関する内容と評価

今年度、精神看護学領域の講義は当初の予定通り終了し、新カリに向けてシラバスの整備も終了した。領域別実習では総合実習が当初の予定通り実施できたが、専門領域別実習では、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い実習クールの一部が学内実習を余儀なくされたが、他は概ねフルスペックの領域別実習を修了することができた。

学内実習に振替となった学生には学修上の不利益とならないように、事例を提供し、その事例に沿った看護計画のプレゼンテーションによる質疑応答を通して、看護計画策定の根拠を深める演習を行った。また、精神科病院で実習できたグループの看護計画策定の作業と一緒に参加してもらい、質疑応答によって実際の事例を通して看護計画策定の根拠を学ぶ機会を準備した。新型コロナ感染拡大に伴う領域別実習の制限は、このような工夫によって学生の不利益を最小限にすることができたと考えている。

また、毎年、看護計画策定用紙の書式を学生の自然な認知過程に沿ったものになるよう修正を施してきたが、新年度を見越して書式の改訂を行い、一覧性に特化した書式（一目で看護問題の抽出とその根拠を呈示できるような書式）に改めて、学生の認知過程に沿った学修過程に寄与できるように工夫を凝らした。また、新年度に向けて実習施設と実習期間の一部見直しを行った。

3. 精神看護学領域における研究に関する内容と評価

精神看護学領域では、研究室構成員それぞれの専門性の確立を目指している。

現在、分野としては2020年の学内共同研究に採択された『岩手県沿岸部にある医療機関と看護系大学の新たな連携の構築—ICTを活用した看護支援プログラムのニーズ調査』（以下、「ニーズ調査」と略）結果に基づいて、2021年度は『岩手県沿岸部にある医療機関の看護部に対するICTによる地域貢献—継続した看護研究の支援プログラム提供の可能性について』（以下「ICTによる地域貢献」と略）が学内共同研究に採択され、先の「ニーズ調査」において看護研究支援プログラムに参加意向を示したX医療施設を対象に、プログラムの提供を提供しICTによる実現可能性を評価・検証した。

「ICTによる地域貢献」の結果は、先の2021年度岩手保健医療大学学内研究報告会において発表し、看護研究4課題を2グループに分けて、年間22回のZoomによるセッションによって得られた成果を報告した。当初計画していたICTによる看護研究支援の可能性は、対象施設職員の看護実践に確実に寄与できる看護研究に繋がったことと、またそれによる満足度を確認することができた。今後もいくつかの問題と課題を残してはいるが、これらを解決しながら、ICTを活用した地域貢献の活動を展開していく計画である。

ついでには、今回の看護研究支援プログラムに参加した医療機関にはICTによる各種の支援を継続することとし、岩手県沿岸部の医療機関にこだわらず、岩手県内の医療機関を対象に看護研究支援プログラムやコンサルテーションなどの各種支援を提供する予定である。

補足) 佐藤助手が、2022年3月に修士(学術、放送大学大学院)を取得した(修論テーマ: COVID-19流行禍の過疎地域にある医療機関の看護師教育の課題)。長南准教授が、2022年から科研(基盤C)に採択された(研究テーマ: ASDのある成人の感覚特性と関連する生活のしにくさの実態に関する研究)。

以上

2021 年度 地域看護学領域活動報告

1. 領域構成

鈴木るり子（教授）、石田知世（助手）

2. 地域看護学領域における教育に関する内容と評価

1) 専門基礎科目及び統合科目における教育内容と評価

3 年前・後期に「ヘルスプロモーション論」「災害援助論」「地域看護学概論」「地域看護援助論」「保健医療福祉連携論」を開講し、4 年前期に「災害看護論」「保健医療福祉行政論」を開講した。学生の授業評価では「制度・法令の理解」に困難感がみられ、次年度は改善を図る事とした。その他、4 年生 7 名の「卒業研究計画書」を完成させた。

2) 公衆衛生看護学領域科目における教育内容と評価

「公衆衛生看護技術論」「公衆衛生看護管理論」は、4 年前期に保健師課程学生 20 人に開講した。時間割がタイトであり、科目展開の順序性にも問題が生じた。このことは、学生の授業評価においても指摘されており、次年度は改善を図る事とした。

3) 「地域看護学実習」「公衆衛生看護学実習」「総合実習」における内容と評価

実習は 4 年前期に実施した。「地域看護学実習」は地域事例のアセスメントの過程を通して、健康課題の抽出を捉え、看護職が地域アセスメントを実施する必要性について学びを深めた。学生の評価は、平均 3.78/4 であった。保健師課程学生 20 名の「公衆衛生看護学実習」は実習地 2 か所から中止の申し出があり、急遽変更したが学生の満足度 3.89/4 と高かった。また、「総合実習」は、6 名が健康課題解決の政策提言を行うことを実習項目とし、積極的に取組、指導者から高い評価を得た。学生評価は概ね 4 であり、満足度は高かった。

3. 地域看護学領域における研究に関する内容と評価

本年度は、地域看護学領域として取り組んだ研究はなかった。

鈴木教授の研究内容は、2011 年 3 月 11 日に発災した東日本大震災被災者の支援を目的にした大規模コホート研究：the RIAS Study（厚生労働科学研究費）に分担研究者として 10 年間従事してきた。対象地区は、岩手県山田町、大槌町、陸前高田市の全住民を対象に健康診断および健康状態調査を実施し、報告書を作成した。健康診断および健康調査は 2020 年度で終了し、2021 年度は、論文投稿と学会発表をした。現在もデータ分析中であり、今後も投稿論文作成予定である。

評価として、地域看護学領域として取り組んだ研究はなかったことから、次年度は改善を図りたいと考えている。

以上

2021 年度 在宅看護学領域活動報告

1. 領域構成

大沼由香（教授）、加藤美幸（助教）、工藤美由紀（助手）

2. 在宅看護学領域における教育に関する内容と評価

2021 年度は、1 年次科目の「基礎ゼミナール」（大沼）、在宅看護学領域に関する科目としては、3 年次科目の「在宅看護学概論」（大沼）、「在宅看護援助論」（大沼・加藤）を担当した。また、4 年次学生対象としては「在宅看護技術論」（大沼・加藤）、「在宅看護学実習」（大沼・加藤・工藤）を担当した。さらに、「総合実習（在宅看護学領域）（学生 4 名）」（大沼・加藤・工藤）、「卒業研究ゼミナール（学生 4 名）」（大沼・加藤）を開講した。

教育に関する学生からの授業評価は「在宅看護にとっても興味がわいた」、「在宅看護の看護展開の仕方や大事なことがわかりやすく学べた。」、「実践に基づいた在宅看護についての知識が深まった。」等々好意的、肯定的であった。一方で、演習時の教員連携不足の指摘があり、演習準備を万全とする必要がある。

一方、1 年生のアドバイザーとして看護専門基礎科目の学修や学生生活を大沼教授と加藤助教が担当し、定期面談を行い学修と学生生活について相談を受けるとともに状況把握に努めた。また加藤助教は国試対策委員として、模擬試験の監督や成績入力、分析等を担当した。

4 月に大沼教授が着任し、在宅看護学領域としての授業や実習の方針を共有する時間が不足し、早急な体制構築は困難であったが、学生の不利益とならないように大沼教授、加藤助教、工藤助手が協力し実習準備を進めた。新型コロナウイルス流行下での臨地実習は、臨地に通う日数や時間短縮の工夫により、学生全員が臨地で実習することができた。新型コロナウイルスの流行継続に備え、感染対策を講じた授業の実施、臨地での充実した臨床教育ができるように一層の工夫が必要となると思われる。

3. 在宅看護学領域における研究に関する内容と評価

大沼教授は 2019 年度科研費助成事業に採択された研究を本年度も継続している。今年度は、新型コロナウイルスの影響によりデータ収集が思うように進まず、遂行計画の変更が必要となった。しかし前年度までに収集したデータを大沼教授、加藤助教、工藤助手で分析し、日本在宅ケア学会（Wwb 開催）、日本地域看護学会（Web 開催）で 3 本の学会発表を行った。さらに分析を進め、学会発表と論文投稿を準備中であり、さらなる研究の継続と進展を目指す。

また、学内で「在宅ケアチーム」（大沼教授・加藤助教・工藤助手・鈴木・石田・相澤）を結成し、岩手いきいき財団の助成金を獲得して「新型コロナウイルス感染予防と地域での暮らしを守る事業」を企画実施した。在宅ケア従事者を対象として、認知症高齢者や障害者の人権を尊重しながら新型コロナウイルスの感染を予防する意義と方法の研修会を開催した。研修会では講義とグループワークを取り入れ、新型コロナウイルスの流行によりオンラインに変更して開催した。参加者は訪問看護師、老人ホーム施設長、介護支援専門

員、介護職員等であった。事業終了後、事業報告書を作成している。本事業の実施内容をまとめ、次年度は学会での発表を予定している。

さらに大沼教授は、新カリキュラムに対応するための「地域・在宅看護実習ハンドブック」(中央法規出版)を執筆した。看護学生や在宅看護学実習施設の指導者に活用いただける内容となっており、在宅看護学実習指導に役立てたい。

以上

2021年度 大学院科目一覧

【共通科目】

	科目名称	開講時期	単位数	担当教員	開講
必修	看護研究方法特論	1前	2	勝野とわ子	○
	臨床倫理特論	1後	2	清水哲郎・濱中喜代・石井真紀子	○
	多職種連携特論	1後	2	鈴木るり子・相澤出	○
	看護学教育特論	1後	2	江守陽子・濱中喜代・土田幸子・石井真紀子	○
選択	看護理論特論	1前	2	岡田実	○
	統計学特論	1後	2	大井慈郎	○
	質的研究方法論	1前	2	相澤出	○
	フィジカルアセスメント特論	1前	2	長谷川幹子・江守陽子	
	医療社会学特論	1後	2	相澤出	○
	コンサルテーション特論	1後	2	岡田実	○
	災害看護特論	1後	2	鈴木るり子	

【専門科目】

	科目名称	開講時期	単位数	担当教員	開講
基礎・地域連携看護学領域	基礎看護学特論Ⅰ	1前	2	長谷川幹子	
	基礎看護学特論Ⅱ	1後	2	長谷川幹子	
	基礎看護学演習Ⅰ	1前	2	長谷川幹子・石井真紀子	
	基礎看護学演習Ⅱ	1後	2	長谷川幹子	
	地域看護学特論Ⅰ	1前	2	鈴木るり子	
	地域看護学特論Ⅱ	1後	2	鈴木るり子	
	地域看護学演習Ⅰ	1前	2	鈴木るり子	
	地域看護学演習Ⅱ	1後	2	鈴木るり子	
臨床・応用看護学領域	老年看護学特論Ⅰ	1前	2	勝野とわ子	○
	老年看護学特論Ⅱ	1後	2	勝野とわ子	○
	老年看護学演習Ⅰ	1前	2	勝野とわ子・木内千晶	○
	老年看護学演習Ⅱ	1後	2	勝野とわ子・木内千晶	○
	母性看護学特論Ⅰ	1前	2	江守陽子	○
	母性看護学特論Ⅱ	1後	2	江守陽子	○
	母性看護学演習Ⅰ	1前	2	江守陽子・大谷良子・佐藤恵	○
	母性看護学演習Ⅱ	1後	2	江守陽子・大谷良子・佐藤恵	○
	小児看護学特論Ⅰ	1前	2	濱中喜代	○
	小児看護学特論Ⅱ	1後	2	濱中喜代	○
	小児看護学演習Ⅰ	1前	2	濱中喜代・下野純平	○
	小児看護学演習Ⅱ	1後	2	濱中喜代・下野純平	○
	精神看護学特論Ⅰ	1前	2	岡田実	
	精神看護学特論Ⅱ	1後	2	岡田実	
精神看護学演習Ⅰ	1前	2	岡田実・長南幸恵		
精神看護学演習Ⅱ	1後	2	岡田実・川添郁夫（非常勤）		
看護管理学領域	看護管理学特論Ⅰ	1前	2	伊藤収	○
	看護管理学特論Ⅱ	1前	2	伊藤収	○
	看護管理学特論Ⅲ	1前	2	伊藤収	○
	看護管理学演習	1後	2	伊藤収・土田幸子	○

2021年度 大学院 共通科目活動報告

1. 教員構成

清水哲郎（教授）、濱中喜代（教授）、勝野とわ子（教授）、江守陽子（教授）、岡田実（教授）、鈴木るり子（教授）、長谷川幹子（准教授）、土田幸子（准教授）、石井真紀子（講師）、相澤出（講師）、大井慈郎（講師）

2. 大学院共通科目における教育に関する内容と評価

【看護研究方法特論】勝野とわ子

本科目の到達目標は、1. 看護学における科学的な研究のプロセスを理解し説明できる、2. 量的および質的研究デザインの理解を深め説明できる、3. 量的研究と質的研究のクリテック基準を理解し実践できる、4. 質的研究のデータ収集方法と分析方法についてフィールドワークを実施し理解を深めることであった。履修生は、1～4について高いレベルで達成したと評価する。

【臨床倫理特論】清水哲郎、濱中喜代、石井真紀子

清水が科目責任者となり、濱中、石井と3名で担当した。履修生は5名であった。授業においては、臨床倫理の考え方、臨床倫理検討シートを使った検討の進め方、看護における倫理的な概念等についての教員による講義、および履修者による臨床で遭遇した事例のレポートとそれに基づく共同検討、およびモデル事例の共同検討を行った。

事例の共同検討は、臨床の振り返りとして有意義であった。授業内容の精選とより効果的な構成が今後の課題である。

【多職種連携特論】鈴木るり子、相澤出

「多職種連携特論」は、後期に開講し、鈴木と相澤が担当した。本講義では、多職種連携を理論的に考察する視点として、多職種連携に関する我が国の現状と課題について分析し、社会的な視点を取り入れ教授した。その内容は、専門職論、組織論に関する視点、専門職と実践共同体としてのチームおよびチームケアにおける保健医療福祉専門職種間の連携事例についてグループワークを行い理論的に考察した。履修生5人は単位を取得している。

【看護学教育特論】江守陽子、濱中喜代、土田幸子、石井真紀子

看護教育学の教育・研究を長年担当する教員4名によるオムニバス形式で講義した。生涯教育の観点から、成人学習に関する教育方法の基礎的理論をはじめ、看護職のための教育プログラムの作成、教材開発、教育評価の方法、留意点、看護基礎教育、継続教育の課題と将来構想等について学修し、看護学教育者としての資質を養うよう努めた。

授業方法としては講義だけでなく、グループワーク、院生によるプレゼンテーション、ディスカッション、相互評価の機会を多く設けた。

【看護理論特論】岡田実

選択科目：履修生3名。大理論に加え履修生が自身の修士論文テーマに関連があると判断した中範囲理論も射程に入れて学修した。Edmondsonの心理的安全性に関する著書『恐れのない組織』（英治出版）を指定文献に全員で抄読し意見交換することに加え、P. Bennerの各種文献から看護実践論や教育論について各自のプレゼンテーションとディスカッションを通じて、臨床現場のリアリティと修論テーマとの関連性を厳密にする作業を行った。

【統計学特論】大井慈郎

本授業は、統計学の研究手法について、データの収集方法から多変量解析の基礎までを幅広く扱った。全15回中、5回目以降は、実際に統計ソフトを用い、1人1人がデータセットを操作しながら、分析の意味や結果の読み方、論文執筆の際の表記方法を学習した。院生は、それまでの経歴から、数学や統計に関する知識に差があるが、少人数教育で強みを活かし、理解度を確認しつつ、授業を進行することができた。

【質的研究方法特論】相澤出

質的研究方法特論では、テキストの輪読を中心に、質的研究をめぐる方法論的基礎に関する解説を行った。その後、エスノグラフィー、参与観察法、生活史法、ライフストーリー法にしばらくながら、それらの方法の特徴を明らかにしつつ、ケアの現場での調査におけるメリット、デメリットなどについて解説した。

【フィジカルアセスメント特論】長谷川幹子、江守陽子

開講なし。

【医療社会学特論】相澤出

医療社会学特論では、受講者の関心、研究テーマに配慮しつつ、テキストの輪読を行った。そのなかで社会学における行為論や役割論、スティグマ論、ケア論、医療制度・政策などに関する諸論点について解説を行った。加えてテキストの輪読、報告を通じて、受講者がテキストを解釈し、まとめる力を養成できるよう努めた。

【コンサルテーション特論】岡田実

選択科目：履修生1名。外部コンサルテーションと内部コンサルテーションの役割と責任の対比を学修し、問題解決に困難を抱える医療現場に求められている専門的なスキルを考察しながら、医療機関に従事する専門看護師の具体的な活動を内部コンサルテーションの一例として学修した。悪化する状況に対処する際に必要な想像力・対処力・組織実行力・組織自己学習力が医療従事者個々に試されていることを共通認識した。

【災害看護特論】鈴木るり子

開講なし。

以上

2021年度 大学院 基礎・地域連携看護学領域活動報告

1. 領域構成

鈴木るり子（教授）、長谷川幹子（准教授）、石井真紀子（講師）

2. 大学院共通科目における教育に関する内容と評価

【基礎看護学特論Ⅰ】長谷川幹子

開講なし。

【基礎看護学特論Ⅱ】長谷川幹子

開講なし。

【基礎看護学演習Ⅰ】長谷川幹子、石井真紀子

開講なし。

【基礎看護学演習Ⅱ】長谷川幹子

開講なし。

【地域看護学特論Ⅰ】鈴木るり子

開講なし。

【地域看護学特論Ⅱ】鈴木るり子

開講なし。

【地域看護学演習Ⅰ】鈴木るり子

開講なし。

【地域看護学演習Ⅱ】鈴木るり子

開講なし。

以上

2021年度 大学院 臨床・応用看護学領域活動報告

1. 領域構成

濱中喜代（教授）、勝野とわ子（教授）、江守陽子（教授）、岡田実（教授）、木内千晶（准教授）、長南幸恵（講師）、下野純平（講師）、大谷良子（助教）、佐藤恵（助教）、川添郁夫（非常勤）

2. 大学院臨床・応用看護学領域における教育に関する内容と評価

【老年看護学特論Ⅰ】勝野とわ子

本科目は、高齢者ケアに応用可能な理論として、Parse 看護理論、ストレス・コーピング理論、スピリチュアリティ、セルフケア理論と看護実践について理解を深め、説明できる能力を養うこと、さらに、介護予防および慢性疾患を持つ高齢者の自己管理能力を支援する看護支援方法の探求、高齢者を全人的に査定する健康問題査定法の習得などを目標とした。それらについて、達成したと評価する。

【老年看護学特論Ⅱ】勝野とわ子

本科目は、認知症の種類、病態生理、症状の特徴、診断・治療方法を理解し説明できること、認知症者と家族介護者のアセスメントの指標を理解し実践できること、Dementia ケア理論（Person-centered Care 理論）について理解し説明できること、さらに、認知症者と家族介護者の健康課題や倫理的課題を理解し、社会資源や療養環境の調整を含めた解決策を考えることができることを目標とした。それらについて達成したと評価する。

【老年看護学演習Ⅰ】勝野とわ子、木内千晶

本科目は、院生が興味を持っている現象から文献検討を通して関心領域の研究課題を明らかにすること、さらに文献検討から、課題解決のための研究方法について知見を深め、研究計画書作成のための能力を養うことを目的とした。具体的には、文献検索の方法、文献クリティークの方法を修得し、適切な文献検討をする能力が得られたと評価する。

【老年看護学演習Ⅱ】勝野とわ子、木内千晶

本科目の到達目標は、1. 院生自身の研究テーマに基づいたパイロットスタディを実施できる、2. 収集したデータを分析することを通して修士論文で用いるデータ分析方法について理解し説明できる、3. 修士論文の研究計画書を作成できる、4. 研究倫理審査申請書について理解を深めるであった。1～4について達成したと評価する。

【母性看護学特論Ⅰ】江守陽子

母性看護学領域に関連ある看護課題および生殖年齢にある男女の心理的、身体的、社会的な健康課題について、国内外の文献や事例を参考に、幅広く講義した。また、現代社会に生きる女性と家族、思春期・青年期にある男女の健康課題、疾病の予防、ヘルス

ケアについて、それらを解決・評価する方法や理論を概観し、解説した。院生の興味・関心のある研究テーマについて、課題や研究手法を導き出せるような講義に努めた。

【母性看護学特論Ⅱ】江守陽子

院生の興味・関心のある研究テーマを絞り込むと同時に、生殖年齢にある男女の心理的、身体的健康課題や疾病の予防、健康の保持・増進のための看護職の活動について、保健医療政策に関連深い性と生殖の健康と権利、プレコンセプションケア、包括的性教育に焦点を当て、各々の理論や概念を整理し、理解を深めた。

一方、母性看護学領域の文献や事例を通して研究課題の設定、課題に則した研究デザイン、研究計画、分析方法について検討し、研究遂行能力を養うよう努めた。

【母性看護学演習Ⅰ】江守陽子、大谷良子、佐藤恵

母性看護学領域に関連ある看護課題および生殖年齢にある男女の心理的、身体的、社会的な健康課題について、国内外の文献を収集し、講読するとともに批判的な分析を加えた。また、文献を材料により高度な看護活動の方策について考察を深め、科学的思考を実践に生かすための研究仮説の立て方や研究方法、看護実践の質を評価する意義と方法等について講義した。それによって、母性看護学領域の看護実践研究の基礎的能力が養われることを目指した。

【母性看護学演習Ⅱ】江守陽子、大谷良子、佐藤恵

院生の興味・関心のある研究テーマに沿って、国内外の論文を読み進めた。また、性と生殖の健康と権利、プレコンセプションケア、包括的性教育に関連ある文献の研究結果および看護実践等の分析、批判的評価を通して、自らが取り組むべき研究テーマを確定し、研究する意義について整理することができた。

残り1年間で遂行可能な研究課題に則した研究対象、研究デザイン、具体的研究計画と手順を検討し、研究計画書の作成に着手した。

【小児看護学特論Ⅰ】濱中喜代

小児看護学の対象理解のために、エリクソンの自我発達理論、ピアジェの認知発達理論、コールバーグの道徳性発達理論、マラーの分離－個体化理論、オレムのセルフケア理論について、また乳児期～思春期までの心理的・身体的・社会的特徴の評価と看護について、関連文献の精読と討議を基に学修した。さらに小児と家族を取り巻く社会と関連付けて、健康課題、ヘルスプロモーション、疾病予防、権利擁護等について関連文献を読み込み意見交換した。ほぼシラバスどおりの学修ができ、確実な成果が得られた。

【小児看護学特論Ⅱ】濱中喜代

小児や家族を取り巻く社会環境・状況を踏まえ、子育て支援、虐待防止、災害看護について、また看護援助について、プレパレーション、症状緩和、エンドオブライフケアの視点から、さらにコミュニケーションスキルについて関連文献を精読し討議を基に学修を深めた。特別支援教育については重鎮のゲストスピーカーに講義を実施して頂き、

貴重な学びの機会となった。教育機能・相談機能および健康教育についても関連文献を読み込み意見交換した。ほぼシラバスどおりの学修ができ、確実な成果が得られた。

【小児看護学演習Ⅰ】濱中喜代、下野純平

新生児期～思春期までの援助理論と実践について、院生の発表を基に討議を行い、学修を深めた。また難病のこどもへの看護活動の方策について準備学修後に zoom でのシンポジウムに参加し、その内容について考察したことを発表・討議した。キャンプに参加予定であったがコロナ禍で実現できなかった。さらに最善の利益にかなう看護について、関連文献をクリティークし、自らの考えをレポートしまとめとした。一部変更があったものの、到達目標はおおむね達成できた。

【小児看護学演習Ⅱ】濱中喜代、下野純平

小児看護学に関する研究の動向と課題について講義で概観した。その後院生の研究課題に関する国内外の文献レビューを行った。次いで研究課題の明確化を図り、研究計画の試案を作成した後、数回かけて内容を吟味した。さらに研究倫理審査委員会への提出書類として院生が作成しものを吟味した。最後に委員会の回答を受けて、再度吟味修正し最終案を作成した。ともに内容を吟味する過程で自ら取り組むべき研究遂行能力が養われ、到達目標はおおむね達成できた。

【精神看護学特論Ⅰ】岡田実

開講なし。

【精神看護学特論Ⅱ】岡田実

開講なし。

【精神看護学演習Ⅰ】岡田実、長南幸恵

開講なし。

【精神看護学演習Ⅱ】岡田実、川添郁夫

開講なし。

以上

2021年度 大学院 看護管理学領域活動報告

1. 領域構成

伊藤收（教授）、土田幸子（准教授）

2. 大学院看護管理学領域における教育に関する内容と評価

【看護管理学特論Ⅰ】伊藤收

履修生は3名であった。本科目は「認定看護管理者」の資格取得に資する看護協会で開催されている「認定看護管理者教育課程：ファーストレベル」に相当する科目である。よって、この科目は看護師長経験者向けの内容になっているが、履修生の内の2名が「主任職」は経験していたが、看護師長の経験を有していないことにより、課題レポート作成等には苦労があったと推察できる。

【看護管理学特論Ⅱ】伊藤收

履修生は2名であった。本科目は「認定看護管理者」の資格取得に資する看護協会で開催されている「認定看護管理者教育課程：セカンドレベル」に相当する科目である。上記の「特論Ⅰ」の学修をふまえて、看護部長職を支える次長職（副部長）が担う「人事管理・業務管理」と実習調整、院内教育等が主な学修内容である。

【看護管理学特論Ⅲ】伊藤收

履修生は2名であった。本科目は「認定看護管理者」の資格取得に資する看護協会で開催されている「認定看護管理者教育課程：サードレベル」に相当する科目である。上記の「特論Ⅰ・Ⅱ」の学修をふまえて、看護部長職（副院長職）に必要とされる「目標管理・人事考課・経営参画」などに加え、大学とのユニフィケーションについては、教員の経験をふまえ詳しく教授した。

【看護管理学演習】伊藤收、土田幸子

履修生は2名であった。本科目は「認定看護管理者」の資格取得に向け、必要となる各種の「レポート類」作成を中心に演習を行った、特に自施設の「組織分析」と、それを基にした「組織改善計画」の策定等に重点を置き、さらに「改善計画」に関連して、プレゼンテーションについても教授した。

【看護学特別研究に先立つ「研究指導」】伊藤收

履修生は2名であった。初年度であり、修士学位論文の「研究計画」の策定と、「研究倫理審査」の受審に向けての指導を行った。両名ともに、所属している（していた）岩手県医療局（県立病院）の看護に対する、強い愛着と改善意欲を持っており、それを背景とした研究関心が示された。本研究科も、岩手県に深く強く根ざし、岩手県に必要とされる「看護学修士課程」を目指すものであり、趣旨としては合致するのだが、具体的に修士の学位論文に落とし込むまでの過程では、多くの議論を要した。また、「関連するので」との理由で合同指導が希望された。同様の指導内容も多くあるため効率的である

反面、もうひとりから質問を受けると、教員が元の指導に戻るまでに時間を要したり、もうひとりの指導内容が取り込まれてしまい、それを修正するという場面もあった。この複数の院生を合同で指導することについては、長所と短所があり、一概に（良い悪いの）評価は付けられない。

3. 大学院看護管理学領域における研究に関する内容と評価

（学会発表）

看護師長の承認行為を取り巻く現象の構造 — 看護師長とスタッフナースの調査からの検討 —, 佐藤奈美枝, 伊藤 收, 第 41 回日本看護科学学会学術集会, 2021

この研究は、前任校で指導した博士後期課程の学生の「博士学位副論文」作成のために実施した研究の一部を昨年末の「第 41 回日本看護科学学会学術集会」で発表したものである。看護管理学では、部署管理者である看護師長が部下に対して行っている「承認行為」が、部署運営上重要と認識されていたが、それがどのような構造的性を持っているかについて、これまで余り研究させてこなかった。この研究では【承認行為を行う看護師長】と、その「承認行為を受けるスタッフナース」の双方に調査を実施し、その構造解明に挑んだものである。結果としては、看護師長側から、承認行為を身につけるための「教育プログラム」の必要性などが述べられ、博士後期課程の本論文に活かせる内容を多く獲得することができた。

以上

個人ごと業績

【学部】

■ 清水 哲郎（一般教養：教授）

【著書】

- 1) 清水哲郎・会田薫子・田代志門（編著）：『臨床倫理の考え方と実践：医療・ケアチームのための事例検討法』，共著，東京大学出版会，2022. 全 165+12ps. 清水哲郎 担当執筆部分：Ⅰ-2「臨床倫理事例検討の進め方」（pp. 13-28），Ⅱ-0「モデル事例を使った検討の実際例」（pp. 30-38），Ⅲ-3「臨床の倫理原則における《尊厳》の位置」（pp. 101-104），Ⅲ-4「厚生労働省「人生の最終段階ガイドライン」と《情報共有-合意モデル》」（pp. 105-109）
- 2) 清水哲郎：『医療・ケア従事者のための哲学・倫理学・死生学』単著，医学書院，2022. 全 280 頁.

【学会発表】

- 1) 清水哲郎：教育講演（招待）「高齢者の医療・ケアに関する臨床倫理 — 意思決定プロセスと本人・家族の支援」，第 63 回日本老年医学会学術集会，2021. 6. 11-13（オンライン開催）
- 2) 清水哲郎：特別発言（招待），シンポジウム「呼吸不全の在宅緩和医療と ACP の役割」，日本老年医学会，AMED 三浦班「呼吸不全に対する在宅緩和医療の指針に関する研究」，東京大学大学院人文社会系研究科 上廣死生学・応用倫理講座（共同主催），2022. 3. 6（オンライン開催）

【その他】

- 1) 清水哲郎：生命・人権・医療，民医連医療 586（2021. 7）：18-19
- 2) 清水哲郎：「臨床における生と死」への死生学的アプローチ，千里ライフサイエンス振興財団ニュース No. 95, p. 19, 2022. 2

■ 相澤 出（一般教養：准教授）

【論文】

- 1) 相澤出，2021，「地域医療の担い手が捉える過疎地域の家族と介護の変化：宮城県登米市を事例として」『社会学評論』71(4)：577-594.

【その他】

- 1) 相澤出，2021，「井口高志著『認知症社会の希望はいかにひらかれるのか：ケア実践と本人の声をめぐる社会学的探求』（晃洋書房，2020 年）」『保健医療社会学論集』32(1)：107-108.
- 2) 大沼由香，工藤美由紀，加藤美幸，鈴木るり子，石田知世，相澤出，2022，『地域在

宅における新型コロナ感染対策と尊厳を守るケア事業報告書』公益財団法人いきいき
岩手支援財団助成事業

■ 大井 慈郎（一般教養：講師）

【論文】

- 1) 大井慈郎：地域づくりと閉じこもり防止の隙間：岩手県盛岡市 X 地区における「つながりづくりをしない」高齢者支援を事例に，社会学年報 50，2021. 45-55

【学会発表】

- 1) 大井慈郎，木村雅史，松原久：地域づくりによる介護予防事業の地域受容過程研究：宮城県 X 市高齢者サロンを事例に，第 67 回東北社会学会大会，2021. 7. 18. オンライン
- 2) 大井慈郎：インドネシアにおける人口データ取り扱いの困難性：ジャカルタ首都圏 X 村データを事例に，第 68 回日本都市学会大会，2021. 10. 24. オンライン
- 3) 大井慈郎：「地域づくり」と「閉じこもり防止」の隙間の検討：岩手県 X 市 Y 地区における「つながりづくり」をしない高齢者支援を事例に，第 94 回日本社会学会大会，2021. 11. 13. オンライン

■ 長谷川 幹子（基礎看護学領域：教授）

【学会発表】

- 1) 長谷川幹子，安福真弓，浅井直子，作間弘美：看護大学生における学年間での死生観の変化，第 41 回日本看護科学学会学術集会，2021.

■ 作間 弘美（基礎看護学領域：講師）

【学会発表】

- 1) 長谷川幹子，安福真弓，浅井直子，作間弘美：看護大学生における学年間での死生観の変化，第 41 回日本看護科学学会学術集会，2021，Web 開催.

■ 土田 幸子（成人看護学領域：教授）

【論文】

- 1) 齋藤史枝，勝野とわ子，木内千晶，土田幸子，甲斐恭子：看護系大学におけるタブレット端末活用に向けた基礎的研究－A 大学学生のタブレット端末活用の実態－，日

本看護学教育学会誌, 31(3), 81-89, 2022.

- 2) 松村憲浩, 五十嵐岳, 瀧田郁洋, 菱沼智紀, 井上智友記, 土田幸子, 長田尚彦, 國島広之, 信岡祐彦: 敗血症が疑われる高齢救急患者の予後予測因子についての検討, 日本臨床検査医学会誌, 69(9), 658-664, 2021.

■ 石井 真紀子 (成人看護学領域: 准教授)

【論文】

- 1) 佐藤恵, 成田真理子, 石井真紀子, 添田咲美, 菊池和子, 濱中喜代: 「ケア・スピリット」に関する看護学生の経年的変化—A 大学看護学生に対する調査から—, 岩手看護学会誌, 15(1・2), 58-69, 2021.

【学会発表】

- 1) 佐藤恵, 成田真理子, 石井真紀子, 添田咲美, 菊池和子, 濱中喜代: 「ケア・スピリット」に関する看護学生の経年的変化—A 大学看護学生に対する調査から—, 第14回岩手看護学会(ハイブリット開催), 2021.

■ 添田 咲美 (成人看護学領域: 助手)

【論文】

- 1) 佐藤恵, 成田真理子, 石井真紀子, 添田咲美, 菊池和子, 濱中喜代: 「ケア・スピリット」に関する看護学生の経年的変化—A 大学看護学生に対する調査から—, 岩手看護学会誌, 2021

【学会発表】

- 1) Sakumi Soeda: Discontinued consultation in Type2 Diabetes patients in Japan —A literature review, EAFONS conference, 2021
- 2) 佐藤恵, 成田真理子, 石井真紀子, 添田咲美, 菊池和子, 濱中喜代: 「ケア・スピリット」に関する看護学生の経年的変化—A 大学看護学生に対する調査から—, 岩手看護学会, 2021

■ 佐藤 大介 (成人看護学領域: 助手)

【論文】

- 1) 佐藤大介, 松田浩一, “手術室器械出し看護師の良い渡し方の分析に関する一考察”, 人工知能学会, 身体知研究会第36回研究会論文集, No. 2, <http://www.sigskl.org/activity/papers/sig-sk1-20220212-2.pdf>, 2022.

【学会発表】

- 1) 手術室器械出し看護師の良い渡し方の分析に関する一考察, 佐藤大介, 松田浩一, 第36回身体知研究会(web開催), 2022

【その他】

- 1) 手術看護のイマを知ろう! スルスル読み解き海外文献 vol.9, 佐藤大介, 古島幸江(監修), OPE NURSING, メディカ出版, 第36巻9号, p77-79, 2021

■ 勝野 とわ子 (老年看護学: 教授)

【著書】

- 1) 勝野とわ子: 看護過程. 志自岐康子, 松尾ミヨ子, 習田明裕編, 基礎看護学①看護学概論 (p197-204), メディカ出版, 2022.
- 2) 勝野とわ子: 災害看護の基礎. 志自岐康子, 松尾ミヨ子, 習田明裕編, 基礎看護学①看護学概論 (p296-305), メディカ出版, 2022.
- 3) 勝野とわ子: 看護と人間尊重. 松尾ミヨ子, 城生弘美, 他編, 基礎看護学② 基礎看護技術 I (p44-50), メディカ出版, 2022.
- 4) 勝野とわ子: 高齢者のヘルスアセスメント. 松尾ミヨ子, 城生弘美, 他編, 基礎看護学② 基礎看護技術 I (p365-374), メディカ出版, 2022.

【論文】

- 1) 齋藤史枝, 木内千晶, 勝野とわ子, 土田幸子, 甲斐恭子: 看護系大学におけるタブレット端末活用に向けた基礎的研究—A 大学学生のタブレット端末活用の実態—. 日本看護学教育学会誌, 31(3), p81-89, 2022.

【学会発表】

- 1) 青山美紀子, 勝野とわ子, 出貝裕子, 森田牧子: 若年認知症配偶者が抱く社会的孤立感からネガティブ感情を消失させた要因が及ぼす効果. 日本認知症ケア学会誌, 20(1), p155, 2021.

■ 木内 千晶 (老人看護学領域: 教授)

【論文】

- 1) 齋藤史枝, 木内千晶, 勝野とわ子, 土田幸子, 甲斐恭子: 看護系大学におけるタブレット端末活用に向けた基礎的研究—A 大学学生のタブレット端末活用の実態—. 日本看護学教育学会誌, 31(3), p81-89, 2022.

【学会発表】

- 1) 松尾まき, 高山裕子, 木内千晶: 常勤看護職におけるバーンアウトから離職意向まで SOC とワーク・ライフ・バランス調節力を踏まえた構造方程式モデリングアプローチ, 第 25 回日本看護管理学会学術集会, 2021 年 8 月, 横浜
- 2) Yuko TAKAYAMA, Chiaki KINOUCHI, Maki MATSUO, Atsuko KOBAYAMA: A gender-related comparison of burnout causal model among Japanese hospital nurses, ICN Congress 2021, 2021 年 11 月, オンライン

■ 齋藤 史枝 (老年看護学領域: 助教)

【論文】

- 1) 齋藤史枝, 木内千晶, 勝野とわ子, 土田幸子, 甲斐恭子: 看護系大学におけるタブレット端末活用に向けた基礎的研究—A 大学学生のタブレット端末活用の実態—. 日本看護学教育学会誌, 31(3), p81-89, 2022.

■ 江守 陽子 (母性看護学領域: 教授)

【論文】

- 1) 大谷良子, 佐藤恵, 江守陽子: 不妊治療後出産した女性の出産体験, 日本生殖看護学会誌 18 (1): 11-19, 2021

【学会発表】

- 1) Yoko Emori, Atsuko Kawano: Relationships between the socioeconomic status (SES) of females who raise their children and their health-related QOL/child-raising stress. The 32nd ICM Triennial Congress in Bali, Indonesia. June, Web, 2021. Location: Virtual via Zoom Webinar

■ 大谷 良子 (母性看護学領域: 准教授)

【論文】

- 1) 大谷良子, 佐藤恵, 江守陽子: 不妊治療後出産した女性の出産体験, 日本生殖看護学会誌, 第 18 巻第 1 号, 2021.

■ 佐藤 恵（母性看護学領域：助教）

【論文】

- 1) 佐藤恵, 成田真理子, 石井真紀子, 添田咲美, 菊池和子, 濱中喜代 (2021). 「ケア・スピリット」に関する看護学生の経年的変化—A 大学看護学生に対する調査から—, 岩手看護学会誌, 第 15 巻第 2 号, p58-69
- 2) 大谷良子, 佐藤恵, 江守陽子 (2021). 不妊治療後出産した女性の出産体験, 日本生殖看護学会誌, 第 18 巻第 1 号, p11-19

【学会発表】

- 1) 佐藤恵, 成田真理子, 石井真紀子, 添田咲美, 菊池和子, 濱中喜代 (2021). 「ケア・スピリット」に関する看護学生の経年的変化—A 大学看護学生に対する調査から—, 第 14 回岩手看護学会学術集会 (Web 開催)

■ 濱中 喜代（小児看護学領域：教授）

【論文】

- 1) 佐藤恵, 成田真理子, 石井真紀子, 添田咲美, 菊池和子, 濱中喜代 「ケア・スピリット」に関する看護学生の経年的変化—A 大学看護学生に対する調査から— 岩手看護学会誌 15 (1) 58-69 2021.

【学会発表】

- 1) 下野純平, 遠藤麻子, 濱中喜代, 遠藤芳子 小児科外来を受診した保護者の思いに関する国内文献検討 日本小児看護学会第 31 回学術集会 2021 年 6 月 WEB 開催 講演集 p123
- 2) 佐藤恵, 成田真理子, 石井真紀子, 添田咲美, 菊池和子, 濱中喜代 「ケア・スピリット」に関する看護学生の経年的変化—A 大学看護学生に対する調査から— 第 14 回岩手看護学会学術集会 (Web 開催), 2021 年 10 月

■ 下野 純平（小児看護学領域：准教授）

【学会発表】

- 1) 下野純平, 遠藤麻子, 濱中喜代, 遠藤芳子: 小児科外来を受診した子どもの保護者の思いに関する国内文献検討, 日本小児看護学会第 31 回学術集会, 2021 年 6 月～7 月, Web 開催.

【その他】

- 1) 濱中喜代, 下野純平: 2022 年度版医学書院看護師国家試験問題集, 『系統看護学講

座』編集室編集，医学書院，2021．小児看護学一般問題・状況設定問題の解答・解説

■ 遠藤 麻子（小児看護学領域：助手）

【学会発表】

- 1) 下野純平，遠藤麻子，濱中喜代，遠藤芳子：小児科外来を受診した子どもの保護者の思いに関する国内文献検討，日本小児看護学会第31回学術集会，2021年6月～7月，Web開催．

■ 岡田 実（精神看護学領域：教授）

【著書】

- 1) 阿保順子，岡田実，東修，那須典政共著：統合失調症急性期看護学一患者理解の方法と理論にもとづく実践，すびか書房，2021
- 2) 岡田実：ナイチンゲールの女性論—ラスキン，J. S. ミル，ガマーニコフとの比較から（所収：河村貞枝，出島有紀子，岡田実他：ナイチンゲールの越境3・ジェンダー，ナイチンゲールはフェミニストだったのか，31-76頁，日本看護協会出版会，2021

■ 長南 幸恵（精神看護学領域：准教授）

【学会発表】

- 1) 小川七世，岡田俊，橋本竜作，長南幸恵，鈴木匡子：能動的触覚による形態認知の障害を呈した成人自閉スペクトラム症の1例，第47回日本コミュニケーション障害学会学術講演会，2021年7月30日，新潟（朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター）．

【その他】

- 1) 長南幸恵，小川七世，菅野重範，鈴木匡子：自閉症スペクトラム症における触質感知覚および触覚性形態認知の検討，文部科学省研究費補助金新学術変革領域研究(A)「実世界の奥深い質感情報の分析と生成」B01項目「質感生体認識」第3回深奥質感領域班会議，2022年3月24日，オンライン開催．

■ 佐藤 つかさ（精神看護学領域：助手）

【論文】

- 1) 佐藤つかさ：COVID-19流行禍の過疎地域にある医療機関の看護師教育の課題～看護

部長の視点から～，放送大学大学院修士課程学位論文，2021

■ 鈴木 るり子（地域看護学領域：教授）

【論文】

- 1) Megumi Tsubota-Utsugi, Yuki Yonekura, Ruriko Suzuki, et al. (2021) : Psychological Distress in Responders and Nonresponders in a 5-year Follow-up Health Survey: The RIAS Study. Journal of Epidemiology 2021.

【学会発表】

- 1) 坪田（宇津木）恵，佐々木亮平，鈴木るり子（2021）：東日本大震災被災者高齢者における不眠に対する感覚機能障害の累計的影響，第80回日本公衆衛生学会，2021，東京.
- 2) 鈴木るり子，佐々木亮平（2022）：災害公営住宅入居者における「住まい」が「住まい方」に及ぼす影響：The RIAS Study，第10回日本公衆衛生看護学会，2022，大阪.
- 3) 鈴木るり子，松川久美子，石川美弥子（2022.3）：久慈地域における地域エンパワーメントによるALS患者の医療的ケア体制の構築，第33回岩手公衆衛生学会，2022.3，矢巾町.

【その他】

- 1) 大沼由香，工藤美由紀，加藤美幸，鈴木るり子，石田知世，相澤出：地域在宅における新型コロナ感染対策と尊厳を守るケア事業報告書，公益財団法人いきいき岩手支援財団助成事業，2022.1月

■ 石田 知世（地域看護学領域：助手）

【その他】

- 1) 大沼由香，工藤美由紀，加藤美幸，鈴木るり子，石田知世，相澤出：地域在宅における新型コロナ感染対策と尊厳を守るケア事業報告書，公益財団法人いきいき岩手支援財団助成事業，2022.1月

■ 大沼 由香（在宅看護学領域：教授）

【著書】

- 1) 尾崎章子編著：「地域・在宅看護実習ハンドブック」，共著，中央法規出版，2021. 全177ps，大沼由香担当執筆部分：第1部第4章3.5, 第2部7.15.27

【論文】

- 1) 大沼由香, 星純子, 鹿野卓子: 新型コロナウイルスパンデミック期における在宅看護実習による学生の学び, 日本伝統医療看護連携学会誌, 2 (2), 65-73, 2021.
- 2) 鹿野卓子, 大沼由香: 短期大学看護学生の地域共生型サービスでの学び—フィールドワークを通して—, 日本伝統医療看護連携学会誌, 2 (2), 94-100, 2021.
- 3) 山崎忍, 大沼由香: 事例検討会の運営方法の提案—介護支援専門員による家族への支援事例を通して—, 日本伝統医療看護連携学会誌, 2 (2), 85-93, 2021.
- 4) 佐竹正延, 石母田由美子, 立石和子, 井上由紀子, 大沼由香, 佐藤喜根子他: 新型コロナウイルス感染症流行時における仙台赤門短期大学の対応, 日本伝統医療看護連携学会誌, 2 (2), 20-24, 2021.

【学会発表】

- 1) 大沼由香: COVID-19 パンデミックにおけるオンライン事例検討の可能性, 日本看護学教育学会第31回学術集会, 2021. 8~9月 (WEB開催)
- 2) 大沼由香, 加藤美幸, 工藤美由紀, 鈴木慈子, 工藤うみ, 芳賀博: 宮城県A市における地域包括支援センターの自主活動グループの立ち上げ支援の特徴と課題, 第26回日本在宅ケア学会学術集会, 2021. 8月 (ハイブリット開催)
- 3) 大沼由香, 工藤美由紀: 青森県B市の地域包括支援センターが行う自主活動グループ支援における課題, 日本地域看護学会第24回学術集会, 2021. 9月 (WEB開催)
- 4) 立石和子, 大沼由香, 佐藤浩一郎, 佐藤喜根子: コロナ禍における看護短大生の学修への影響—Webアンケート調査結果より—, 日本看護学教育学会第31回学術集会, 2021. 8~9月 (WEB開催)
- 5) 工藤美由紀, 大沼由香, 加藤美幸, 富永壮, 立石和子, 芳賀博: 北海道千歳市の介護予防センターと地域包括支援センターの連携による自主活動グループの立ち上げ支援の特徴と課題, 第26回日本在宅ケア学会学術集会, 2021. 8月 (ハイブリット開催)
- 6) 工藤うみ, 大沼由香: 介護施設における看取りに対する介護職員の態度構造とその変化, 第26回日本在宅ケア学会学術集会, 2021. 8月 (ハイブリット開催)
- 7) 立石和子, 大沼由香, 浦山さか, 横手裕: 看護系大学における「倫理」教育の現状, 第3回日本伝統医療看護連携学会学術大会, 2021. 11~12月 (ハイブリット開催)
- 8) 松坂美希子, 大沼由香: 多職種によるリフレクションを用いた事例検討会運営の効果と課題, 第45回日本死の臨床研究会年次大会, 2021. 12月 (WEB開催)

【その他】

- 1) 大沼由香, 及川奈保美, 開沼美由紀, 立石和子: 多職種連携事例検討会の提案~わかる事例検討会~, 日本看護学教育学会第31回学術集会, 2021, 8月交流集会 (WEB開催)
- 2) 大沼由香, 工藤美由紀, 加藤美幸, 鈴木るり子, 石田知世, 相澤出: 地域在宅における新型コロナ感染対策と尊厳を守るケア事業報告書, 公益財団法人いきいき岩手支

援財団助成事業，2022. 1 月

■ 加藤 美幸（在宅看護学領域：助教）

【学会発表】

- 1) 大沼由香，加藤美幸，工藤美由紀，鈴木慈子，工藤うみ，芳賀博：宮城県 A 市における地域包括支援センターの自主活動グループの立ち上げ支援の特徴と課題，第 26 回日本在宅ケア学会学術集会，2021. 8 月（ハイブリット開催）
- 2) 工藤美由紀，大沼由香，加藤美幸，富永壮，立石和子，芳賀博：北海道千歳市の介護予防センターと地域包括支援センターの連携による自主活動グループの立ち上げ支援の特徴と課題，第 26 回日本在宅ケア学会学術集会，2021. 8 月（ハイブリット開催）

【その他】

- 1) 大沼由香，工藤美由紀，加藤美幸，鈴木るり子，石田知世，相澤出：地域在宅における新型コロナ感染対策と尊厳を守るケア事業報告書，公益財団法人いきいき岩手支援財団助成事業，2022. 1 月
- 2) 2021 年 第 20 回認定看護師認定更新審査（皮膚・排泄ケア認定看護師）合格、資格更新する。

■ 工藤 美由紀（在宅看護学領域：助手）

【学会発表】

- 1) 工藤美由紀，大沼由香，加藤美幸，富永壮，立石和子，芳賀博：北海道千歳市の介護予防センターと地域包括支援センターの連携による自主活動グループの立ち上げ支援の特徴と課題，第 26 回日本在宅ケア学会学術集会，2021. 8 月（ハイブリット開催）
- 2) 大沼由香，工藤美由紀：青森県 B 市の地域包括支援センターが行う自主活動グループ支援における課題，日本地域看護学会第 24 回学術集会，2021. 9 月（WEB 開催）

【その他】

- 1) 大沼由香，工藤美由紀，加藤美幸，鈴木るり子，石田知世，相澤出：地域在宅における新型コロナ感染対策と尊厳を守るケア事業報告書，公益財団法人いきいき岩手支援財団助成事業，2022. 1 月

以上

【大学院】

■ 伊藤 收（看護管理学領域：教授）

【学会発表】

- 1) 佐藤奈美枝, 伊藤收：看護師長の承認行為を取り巻く現象の構造 — 看護師長とスタッフナースの調査からの検討 —, 第41回日本看護科学学会学術集会, 2021

以上

外部資金獲得状況

外部資金獲得状況一覧

・看護学部看護学科

清水哲郎 (一般教養：教授)

1) 基盤研究(A)(代表)

課題番号：18H03572

研究課題名：臨床倫理システムの哲学的展開と超高齢社会への貢献および医療者養成課程への組み込み

濱中喜代 (小児看護学：教授)

1) 基盤研究(A)(分担)

課題番号：18H03572

研究課題名：臨床倫理システムの哲学的展開と超高齢社会への貢献および医療者養成課程への組み込み

勝野とわ子 (老年看護学：教授)

1) 基盤研究(C)(代表)

課題番号：20K10918

研究課題名：若年認知症家族介護者の経験している「慢性的悲嘆」と健康に関する研究

2) 基盤研究(C)(分担)

課題番号：19K10991

研究課題名：若年認知症家族介護者の健康問題の「見える化」による支援システムの構築

木内千晶 (老年看護学：教授)

1) 若手研究(代表)

課題番号：21K17426

研究課題名：高齢者看護に携わる看護補助者のワーク・エンゲイジメント・プロセスモデルの検証

大沼由香 (在宅看護学：教授)

1) 若手研究(代表)

課題番号：19K19725

研究課題名：地域包括支援センターが行う住民主体の介護予防活動の創出支援システムの開発

2) 基盤研究(C)(分担)

課題番号：19K11108

研究課題名：生活保護現業員と保健師の協働による自己効力感向上を目指したケース会議の検証

3) 基盤研究(A)(分担)

課題番号：19H00515

研究課題名：アジアの伝統医学における医療・医学の倫理と行動規範、及びその思想的な研究

長南幸恵 (精神看護学：准教授)

1) 基盤研究(C)(代表)

課題番号：16K12158

研究課題名：ASD 児の各感覚の特性と生活の困難さに関する研究

相澤出 (一般教養：准教授)

1) 基盤研究(A)(分担)

課題番号：18H03572

研究課題名：臨床倫理システムの哲学的展開と超高齢社会への貢献および医療者養成課程への組み込み

2) 基盤研究(C)(分担)

課題番号：21K02245

研究課題名：地方女子ミッション教育の比較歴史社会学的研究

下野純平 (小児看護学：准教授)

1) 若手研究(代表)

課題番号：21K17389

研究課題名：早産児の両親を支援するフォローアップ外来における看護援助開発に向けた基礎的研究

大谷良子 (母性看護学：准教授)

1) 若手研究(代表)

課題番号：19K19685

研究課題名：体外受精により妊娠した女性の妊娠・出産体験のとらえ方に関する研究

大井慈郎 (一般教養：講師)

1) 若手研究(代表)

課題番号：17K13838

研究課題名：東南アジア都市における工業団地労働者の地域・階層移動研究

佐藤恵 (母性看護学：助教)

1) 若手研究(代表)

課題番号：19K19650

研究課題名：分娩様式を問わない出産体験評価尺度の実用化にむけた検討

石田知世 (地域看護学：助手)

1) 基盤研究(C)(分担)

課題番号：19K11200

課題研究名：渡航看護のコンピテンシー・モデルの開発と渡航看護認識向上プログラムの検討

以上

・看護学研究科 看護学専攻

伊藤 收 (看護管理学：教授)

1) 基盤研究(C)(分担)

課題番号：17K12122

課題研究名：学習者中心パラダイムに基づく看護人材育成のための自己点検支援ポータル開発

以上